

日本のモダニズム建築を訪ねる

——知られざる名建築をもとめて——（全 10 回）

第4回 日常に生き続けるモダニズム建築： 梅月堂

香川 浩（建築家）

昭和 11（1936）年 10 月 15 日。山形市の中心街の一角に、菓子舗の入る商業ビルがオープンした。店の名を「梅月堂^{ばいげつどう}」といい、明治 22 年（1889 年）に創業した老舗で、店舗が昭和 8 年（1933 年）の山形市の都市計画決定による区画整理にかかったことから、あらためて建て直したのである。県庁に近く、銀行の斜向かいとなる角地で、当時は十字街と呼ばれた。いまでも中心市街地の一等地といえる場所だろう。その新装開店を伝える新聞広告には、記念イベントにやってくる高杉早苗ほか松竹スターたちの名前とともに、こう書かれていた。



梅月堂

『新築落成・東北に誇る唯一の近代式新興建築の粹』

設計は新進気鋭の建築家、山口文象^{ぶんざう}¹（1902-1978）である。

建築家の誕生

山口文象はエリートではない。その放胆さによって運命を切り開き、建築家となった。浅草の大工の家に生まれ、職工徒弟学校を卒業後、清水組²の定夫、つまり建築現場で働く職人となり、ほどなく退職し建築家を目指す。大正 9（1920）年、最初に尊敬していた建築家、中條精一郎の元を訪ねるも雇ってはもらえなかったが、紹介された逓信省営繕課で製図工になる。



山口文象（提供：アール・アイ・エー）

今でいうトレーサー、いや、CADのオペレーターか。ここで建築家山田守と出会い「建築家の一番初めの門が開いた」³。上司である山田は、山口の能力を高く評価し、建築のデザインにも関わらせていた。製図工としては異例のことである。また、山田をはじめとする東京帝大出身者たちが、新しい建築のあり方を求めて設立した「分離派建築会」への参加、製図工仲間との「創宇社建築会」結成など、建築運動にも積極的に関わるようになっていった。さらには東京帝大で、建築界の巨匠伊東忠太の講義を“もぐり”で聴講し、親しく接していたという。これが二十歳前後のことであるから、何と痛快な若者であったことだろう。社会のいたるところにヒエラルキーが厳然としてある一方で、このような寛容さを、大正という時代は育んだ。

関東大震災の翌年大正13(1924)年、内務省に復興局が設置され、山口はその橋梁課に山田守とともに移籍し、主に橋梁デザイン(清洲橋、浜離宮正門橋など)を担当した。土木デザインに関わることは、さらなる飛躍のきっかけとなった。日本電力の仕事を兼務し、ダムデザインの手がけるようにもなった。その後、竹中工務店、石本喜久治建築事務所を経て、ついに渡欧することになる。名目は日本電力の黒部第二発電所の設計のための学術調査だったが、当時傾倒していたモダニズムの巨匠、ワルター・グロピウス(Walter Gropius, 1883-1969)の元での修行が主な目的であった。シベリア鉄道で欧州へ向かったのは昭和5(1930)年末、28歳のときだった。グロピウスの事務所では「ソビエト・パレスのコンペ案」などの仕事に携わり、カールスルーエ工科大学では発電所ダム形状についての指導を受け、欧州各地を視察し、パリではル・コルビュジエ(Le Corbusier, 1887-1965)にも会った。まさしく最先端の風を存分に浴び、洋行帰りの建築家として船で帰国したのは昭和7(1932)年のことである。

帰国後すぐにプロジェクトに恵まれ、「日本歯科医専・附属病院(1934)」、「番町集合住宅(1936)」、「黒部川第二発電所・小屋ノ平ダム(1936、DOCOMOMO Japan 選定建築物)」など、最新のインターナショナル・スタイルを山口流に使いこなし、次々とモノにしていった。山口文象のキャリアにおける、ひとつのピークといえる時代。山形の「梅月堂」は、そんなときに出来上がった。

カフェの人びと

時間を少し遡って、山口文象がまだ6歳だった明治41（1908）年、横浜港を出港するアメリカの船に、日本人の一団が乗船していた。朝日新聞社主催の「世界一周会」参加者の面々である。日本初の海外パッケージ・ツアーであり、96日間で世界一周する行程という、今から考えても十分に豪華なツアーで、財界人を中心とする参加者の中に、ひとりの菓子職人がいた。小川茂七といい、神楽坂にある菓子舗「紅谷」の主人である。小川茂七もまた、時代の最先端を求め世界に旅立ったのである。各地で洋菓子づくりを見聞し、果たして紅谷はハイカラ文化人の集まる人気店として大成功をおさめた。

この小川茂七、実は山形出身で梅月堂の縁者で、先述の山形市中心街の土地を自ら取得するなど、梅月堂に深く関わっていた。梅月堂のほうでも、東京で洋菓子店・カフェとして成功した神楽坂紅谷を、理想のビジネスモデルとして見ていたであろう。ある菓子店研究者による「梅月堂設計での山口文象の起用は小川茂七の紹介ではないか」という指摘があるが、筆者もそう考えるのが自然であると思っている。無縁な地方都市の小さな店舗といえども、東京の名店からの依頼とあれば、当然引き受けたらうし、若き山口文象が神楽坂紅谷を訪れ、そこに集まる人々と交流を持っていたとしても何の不思議もない。

モダニズム建築との邂逅

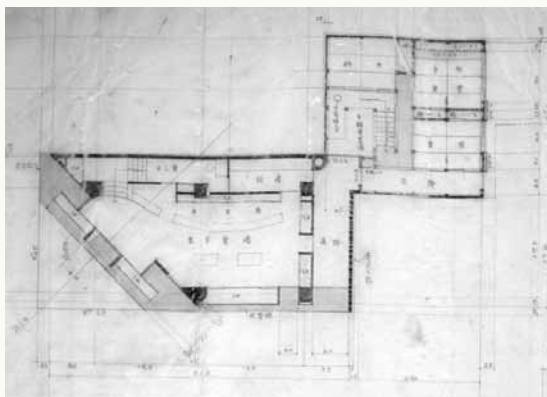
梅月堂が竣工間もない頃の、山形市中心市街地が写った絵はがきを見ると、



梅月堂絵はがき（提供：東北芸術工科大学東北文化研究センター）

区画整理によって整備された街並の中に洋風のデパートなども建ち、仙台と山形を繋ぐ仙山線の開通もあり、山形市全体が活況を呈していた様子が伺える。そんななかでも、梅月堂のモダニズム建築としての純度の高さは群を抜いている。

都市計画による角切り部をファサードとし、スチールサッシによる大開口部としているのが最大の特徴である。外皮は連装窓のある薄い鉄筋コンクリートの壁によって構成され、1階のセットバックにより地面と切り離し、屋上には庭園が設けられている。ここに典型的なモダニズムのかたちが見て取れ、グロピウスの影響だけでなく、ル・コルビュジエの近代建築5原則さえ読みとることもできる。プランは道路に面した鉄筋コンクリート造の部分と、敷地奥の木造部分からなり、土地形状に合わせて角部で接続しているのがユニークだ。鉄筋コンクリート部は一部地下にボイラー室、1階に菓子売り場、2階は喫茶店、3階はパーティー用のホール、屋上はパーゴラのある庭園で、竣工写真に植物が置かれているのが見える。木造部分は1～3階に客室とあり、畳が敷かれている。これは椅子に座る習慣のない客にも対応したのだろう。3階の一部に使用人室、4階に物置と物干し場が設けられている。構法的にもプランとしても和洋を組み合わせたハイブリットであり、その両方を巧みに扱うことのできた山口文象ならではの設計である。



1階平面 (提供：アール・アイ・エー)



外観パース (提供：アール・アイ・エー)

それにしてもなぜ山形のような地方都市に、このような純度の高いモダニズムを出現させたのか。筆者は、小川茂七と山口文象に共通する洋行体験がそうさせたのだと考えている。船のデッキを思わせる屋上庭園を皆に体験して欲しかったのではないか。そこから故郷の山々を眺めてみたかったのではないか。

山口文象も、それに素直に答えてみせたのではないか。当時の先端技術たる船をメタファーとしたモダニズム建築は数多い。

梅月堂と神楽坂紅谷は、その後も菓子職人の修業などの交流が続いたと伝えられている。小川茂七は昭和 20（1945）年 3 月に疎開先の山形で死去、神楽坂紅谷は東京大空襲で焼失し、再建されることはなかった。梅月堂は長く繁栄したが、平成 9（1997）年に倒産し、建物は売却された。鉄筋コンクリート造の店舗部分は、改装されテナントビルとして、裏側の木造部分は撤去されウィークリーマンションを増築し、現在に至っている。山口文象は戦後、新たに RIA を立ち上げ、大きな組織へと発展させてゆく。

日常の物語を伝える建築

2009 年に筆者らが中心となり、梅月堂の展覧会とシンポジウムを開催した。元 RIA の伊達美德氏、菓子店研究者の谷口典子氏と語らうなかで、かたちを成したのが、ここに書いたストーリーである。昔の写真や図面の展示には、予想を上回る来場者があったが、かつての梅月堂の繁栄を知るお年寄りが、思い出を語りあう姿が印象に残っている。梅月堂でお茶を飲み食事をすることがステータスであり、多くの人びとにとって、忘れがたい記憶となっている。建築と建築家にとって、これほど価値のあることはないだろう。

山形市の中心市街地はご多分に漏れず苦戦しているが、かつての梅月堂は、完成から 75 年を経た、いまもそこにある。周辺には、山口文象の恩人である中條精一郎の文翔館⁴、伊東忠太の明善寺もある。山形の街をそぞろ歩き乍ら、日本の近現代建築史に思いを馳せてみては如何だろう。

- 1 当時は山口蚊象と名乗っており、設計は「山口蚊象建築設計事務所」の名義。
- 2 現・清水建設
- 3 『新編 山口文象 人と作品』アール・アイ・エー
- 4 旧山形県庁舎。中條精一郎を顧問とし、設計は田原新之助が担当した

参考文献

『山口文象 人と作品』RIA 建築総合研究所、相模書房

『神楽坂がまるごとわかる本』渡辺功一、展望社

『日本初の海外観光旅行』小林健、春風社

菓子店研究者、谷口典子氏の一連の研究